



なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



No.5

野菜の自給率は、本当はもっと低い

日本の野菜の自給率は、80%あることになっている(「なんでやねん」No.4)。しかし、その80%の自給率は、かなり複雑である。

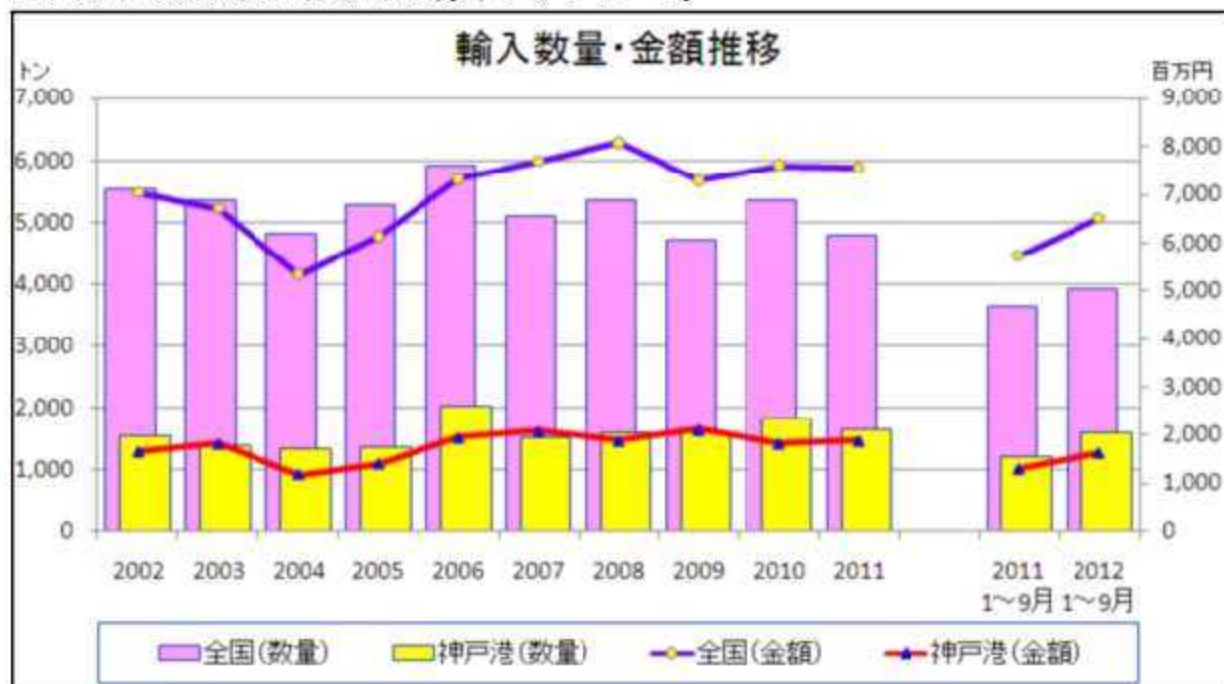
きゅうり、ネギ、大根、かぶ、人参、たまねぎ、ほうれん草、水菜、春菊などの、多くの野菜の種が日本に輸入されている。なんと、日本国内で栽培されている野菜の種の輸入率は、およそ90%である^{*1}。つまり、野菜の種の自給率は10%程度となる。

ただ、食料自給率とは異なり、種の自給率が低いとは断言できない。輸入される野菜の種の多くは、日本から種(原種)を輸出し、海外で栽培、収穫したものだからである。日本の野菜の種は、今やグローバル化の中で育てられているのだ。

神戸税関発表の資料^{*2}を基に、野菜の種の輸入状況をまとめると次のようになる。

1 野菜の種の輸入の動き

2002年から2012年の間の推移を見ると、数量ベースでは、神戸港、全国いずれも2006年が最高である。神戸港で2,037トン、全国で5,917トンの野菜の種を輸入している。一方、金額ベースでは、神戸港は2009年の21億10百万円、全国では2008年の80億81百万円が最高となっている。



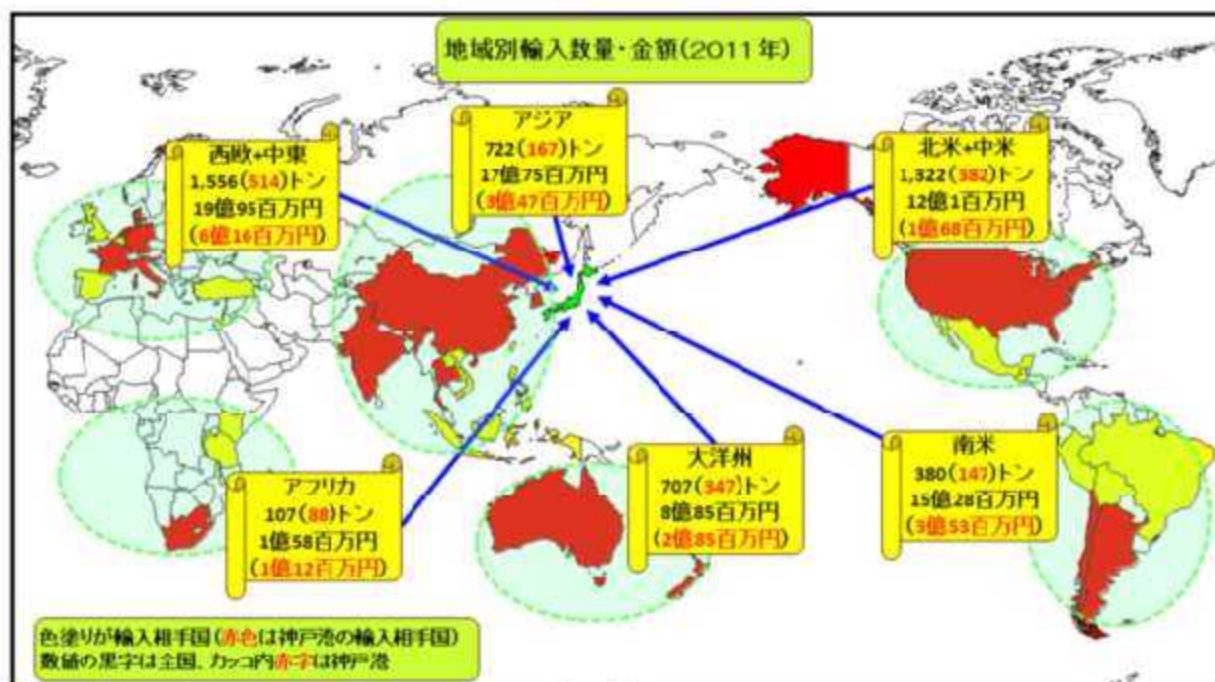
*1 日本経済新聞 2016年3月31日報道。

*2 神戸税関「『野菜の種』の輸入について」2012年。

2 輸入相手国・地域の動向

2011年は神戸港で15カ国、全国では実に32カ国から輸入されている。北半球の国からは11月～1月頃、南半球の国からは5月～7月頃に多く輸入されている。

業界によると、収穫量は天候に大きく左右されるが、北半球で不作だった場合でも、南半球で半年後に同じ種を収穫できるので、安定した供給が保てるから、地球規模で生産・輸入しているとのことである。また、いろいろな国で種の生産を行うことにより、天候不良等によるリスク分散を図ることができるようにしているようだ。



2012年1～9月の国別構成比の上位3カ国を見ると、数量ベースで、神戸港が米国、ニュージーランド、デンマーク、全国では米国、デンマーク、イタリアとなっている。

一方、金額ベースでは、神戸港がイタリア、中国、米国、全国ではチリ、米国、中国となっている。

